

大阪大学 GLOCOL 海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）

2012 年度
海外フィールドスタディプログラム
モンゴル「開発と生存環境」
活動報告書

大阪大学グローバルコラボレーションセンター
OSAKA UNIVERSITY
GLOBAL COLLABORATION CENTER

モンゴル フィールドスタディ 「開発と生存環境」

目次

1. プログラムについて
2. 調査スケジュール
 - i. スケジュールについて
 - A) 事前学習
 - B) 現地調査
 - C) 現地での発表（モンゴル国立科学技術大学）
 - D) 事後発表（大阪大学）
 - ii. 主な様子
3. モンゴル国立科学技術大学での発表
 - i. 発表時のスライド
 - ii. 発表後のディスカッションの概要
4. 調査報告
 - i. 遊牧民と資源利用—民主化以降の変化と課題—
 - ii. 遊牧民の環境と経済の持続可能性について
5. 日蒙幼稚園交流について
 - i. 交流にあたり
 - ii. スケジュールと概要
 - iii. 感想
 - iv. 日本の幼稚園における報告のスライド
6. モンゴルの食べ物
7. 個人総括
 - i. 井上裕太（工学研究科 機械工学専攻 2年）
 - ii. 小田奈緒美（人間科学研究科 人間科学専攻 社会環境学講座 1年）
 - iii. 清水克哉（工学研究科 機械工学専攻 2年）
 - iv. 須和憲和（人間科学研究科 人間科学専攻 人間行動学講座 2年）
 - v. 若井亮介（工学研究科 ビジネスエンジニアリング専攻 2年）

海外フィールドスタディプログラム

モンゴル「開発と生存環境」

(以下、プログラムと略す)

参加者：

- 1.学生 ①井上裕太 (工学研究科 機械工学専攻 2年)
- ②小田奈緒美 (人間科学研究科 人間科学専攻 1年)
- ③清水克哉 (工学研究科 機械工学専攻 2年)
- ④須和憲和 (人間科学研究科 人間科学専攻 2年)
- ⑤若井亮介 (工学研究科 ビジネスエンジニアリング専攻 2年)

2.引率教員

- ①思沁夫
- ②宮本和久
- ③福田州平

期間：

2012年8月21日～31日

プログラムにおける調査地及び活動拠点：

モンゴル国オブルハンガイ県ジューバヤンウラン・ソム・チャガンボルガン
アルバイヘール町
ウランバートル (モンゴル国立科学技術大学)

目的：

本プログラムの目的は、モンゴルの環境だけでなく東アジアにおける環境問題に対する理解を深め、相互理解を促進し、問題意識を共有することである。

そこで、本プログラムでは民主化以降のモンゴルにおいて、鉱山開発により遊牧民の生存基盤が脅かされている実態を現地調査で把握し、学生同士またモンゴル国内における協力者と共に意見交換を行った。

感想：

学生たちの学びは報告書で詳細に綴られているため、ここでは割愛させて頂くが、非常に充実した刺激に富む海外フィールド調査になったと考える。

モンゴルの自然及び社会環境などは、日本と対照をなす。ウランバートルの交通渋滞(首都ウランバートル市内ではホテル到着まで2時間半を要した)、草原における日中の寒暖の激しさ及び厳しい乾燥気候、無野菜とも言える食事などである。学生らはゲルの解体作業を

見学し、狼の分配やモンゴル人における狼の意味などを学んだ(写真1)。

大学の講義で学ぶ環境問題と現場で目の当たりにする環境問題。この2つの環境問題の違いは大きい。今回の滞在で、狼の話も含め、多くの矛盾を体験したことと思う。「ニンジャ」はモンゴルで環境破壊者として語られるが、貧困がニンジャを生む最大要因とも言われる。また、多くのモンゴル人は馬を愛すが、移動や放牧には自動車や自動二輪車(バイク)を愛用する。大規模な鉱山開発の現場は、美しい白鳥の湖(ホンノール)からわずか30キロメートルの地点にあり、鶴の群れは鉱山現場のすぐ近くで見られた(写真2)。

このような矛盾に満ちた現実には、学生たちに環境問題を考察する絶好の機会と材料を提供したと考える。無論、短期間でこれらの矛盾をすべて理解し、分析することは不可能である。だが、本プログラムを通じて全身で受け止めた刺激は、学生の記憶に残り、将来的に活かされることを期待したい。

厳しい自然環境は、メンバー同士及び地域との連携、協力関係を強化した。また、私たちの調査活動は地域の人々に様々な印象を与えた。例えば、モンゴルのマスメディア(自然チャンネル)や大学新聞が私たちのモンゴル国立科学技術大学における発表会を紹介している。今回の草原滞在中で大変お世話になったネルガイさんは、阪大で実施した発表会に以下のコメントを寄せた。「阪大生の皆さんのお陰で家畜と草原ばかりみていた私たちは、モンゴルの星空を見上げるようになった。…モンゴルの夜空もきれいだね」彼の言葉は、私たちが地域の人々に好意を持って迎えられたことを端的に示している。

本プログラムにおいて「学生」や「教員」という身分の枠組みを超越し、議論と冗談を交わした日々は今でも記憶に新しく、教員にとっても学びは多かった。調査地域との良好な関係を維持しつつ、学生たちがモンゴルで植樹した木々の生長も祈りつつ、プログラムの成長も目指してゆきたい(写真3)。

*今回のプログラムが非常に充実した調査となったのは、ネルガイ夫婦をはじめ、ドライバーさん、人間科学研究科の国費留学生のムンフバヤスガランさん夫婦及び彼女の両親など、多くの人の協力によるところが大きい。また、GLOCOLの宮本先生は、調査・交流の指導を非常に熱心に行ない、学生たちが元気で調査に臨めるよう、ほぼ毎日美味しい料理を振る舞って下さった。モンゴル国立大学のソロルさんは、私たちと寝食を共にし、地域のガイドや通訳を務めてくれた。皆様に心底から感謝したい。



写真1 オオカミの頭骨



写真2 オンギ-川上流の鉱山開発の現場と放牧地で餌を探す鶴の群れ



写真3 モンゴルはチベット仏教の国である(左1 ソロルさん)

2.調査スケジュール

i. スケジュールについて

ここでは、モンゴルで実施された調査スケジュール及びインタビューなどの主な内容についてその概要を述べる。調査は事前調査、実地調査（モンゴル）、現地での発表（モンゴル）、事後発表（大阪大学）に大別される。

A) 事前学習

事前学習は、大阪大学吹田キャンパス GLOCOLにおいて行った。5/23、6/6、7/11の計三回にわたり実施された。実施内容については、初回は主にモンゴルに関する基本情報や渡航に関する注意事項である。モンゴルの政治などの様子から、現在問題となつて懸念されている、資源問題や環境破壊等の事柄について情報を得た。また、それに基づき後半の会においては各人が課題を設定すべく得られた情報に基づいて調査及び意見交換を行った。

B) 実地調査

実地調査は以下の日程で行った。それぞれの詳細については写真を用いて後述する

- 21th arrive at *Ulan Bator*
- 22th toward *Tsagaan burgas*
- 23th interview, dissolve the gel @ *Tsagaan burgas*
- 24th see the site of mining & interview Ninja @ *Ulto*
- 25th see the meder and local market @ *ARVAHEER*
- 26th inter view nomads @ *Tsagaan burgas*
- 27th interview Rama, visit kinder garden @ *ARVAHEER*
- 28th plant trees @ *Tsagaan burgas*
- 29th toward Ulan Bator
- 30th presentation at Ulan Bator
- 31th get back to Japan

C) 現地での発表（モンゴル）

現地では調査ないように基づいた発表をウランバートル市内の大学にて実施した。発表の司会を井上が担当し、発表は須和及び小田の A-group、清水及び若井の B-group に別れてそれぞれ発表し質疑を行った。発表のグループ分けは担当するテーマの便宜上の区分であ

る。会場ではモンゴルのテレビ局が取材に訪れており、現地の学生 20 名弱が参加した。また、サポート役として日本語を話せるモンゴルの学生が適宜通訳としてお手伝いいただいた。発表はそれぞれのグループがおよそ 20 分程度行い、15 分程度の質疑が実施された。特に、現地学生と忍者などの抱える問題と今後の発展に向けた課題や取り組みについて議論がなされた。環境問題には我々の抱く懸念と同様の懸念を共有できた一方で、先進国の学生が考える常識と、途上国の学生の考える常識との差が現れることもあり、その認識が有意義なものであったと言える。

D) 事後発表（大阪大学）

11/9に大阪大学グローバルコラボレーションセンターにて事後発表を行った。これは「開発と生存環境」をテーマとしたモンゴルでの調査と「生態環境と水資源」をテーマとした中国（雲南）での調査の共同発表会である。全体の司会を井上が務めモンゴル班の発表内容はモンゴルの現地で発表した内容を日本語にするのに加え、各チームで内容をさらに向上させたものになっている（チームの内訳は同様）。例えば、現地の発表では映像などのデジタルデータを加工する十分な時間がなかったが、今回はその時間があつたためメディアを利用したより分かりやすい発表内容となっている。雲南班の学生からも活発にモンゴルの抱える環境問題についての質問がなされ、発表によりモンゴルの抱える問題提起が出来たのではないかと考えられる。

また、今回の発表会では現在日本に留学中のモンゴル人学生に聴講いただき感想を頂いた。加えて、現地でお世話になった方（宿泊先のオーナーや、同行調査者）の感想やコメントを頂いた。

ii. 主な様子

以下に上記の様子について主な様子を写真とともに一部紹介する。

22日

移動の様子。ウランバートル市内から *Tsagaan burgas* まで1日かけて移動した



現地のゲルにお邪魔し馬乳酒をごちそうになった。



23日 ゲル解体の様子



24日 鉾山の開発現場を見学した
現場においては安全に十分配慮し行動を行った。



同場所にて忍者の方にインタビューを実施し、なぜ忍者になったかなどの経緯などを尋ねた。

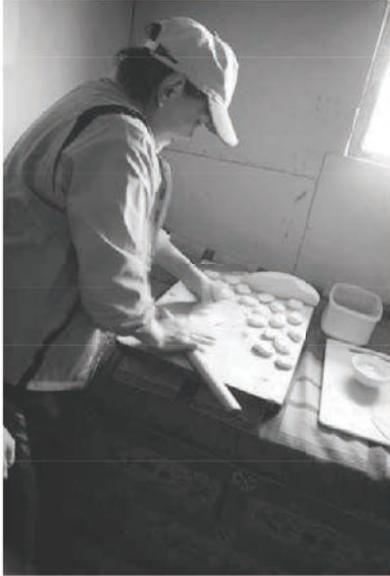


25日 お祭りの会場の風景



26日 遊牧民宅にお邪魔しインタビューを行った

お宅（ムンフバヤスガランの母）でホーショールというモンゴル料理を振る舞っていただいた。我々もその調理を体験した。



遊牧民の乗るバイクに試乗している様子である。



27日 幼稚園を訪問した様子



夜はゲルでの宿泊を体験した。普段はペンションに滞在していたが、1日だけ希望者が体験した。



28日 植樹を行っている様子である。



29日 ウランバートルに戻る道中でタイヤがパンクするアクシデントが発生した。



30日 発表後、通訳として手伝ってくれた学生らと最後の懇親会を現地で行った。



3. モンゴル国立科学技術大学での発表
 i. 発表時のスライド



Field Study

2012 8/30
 @ Ulan Bator

Purpose of Research

- There are many environmental related matters
 - Global warming, Air pollution etc.
- In Mongol
 - Ninja (individual placer mining (gold dust))
 - Growing excess number of livestock
 - Losing traditional culture (especially in Nomads)
 - Discarding of trash
 - Desertification etc...

Contents

<ol style="list-style-type: none"> 1. Self – introduction 2. Purpose of our <i>Research</i> <ul style="list-style-type: none"> – Schedule 3. Results of our <i>Research</i> <ul style="list-style-type: none"> – Group A – Group B 	<ol style="list-style-type: none"> 1. Yuta Inoue 2. Norikazu Suwa 3. Naomi Oda 4. Katsuya Shimizu 5. Ryosuke Wakai
--	---

Where we investigated ??



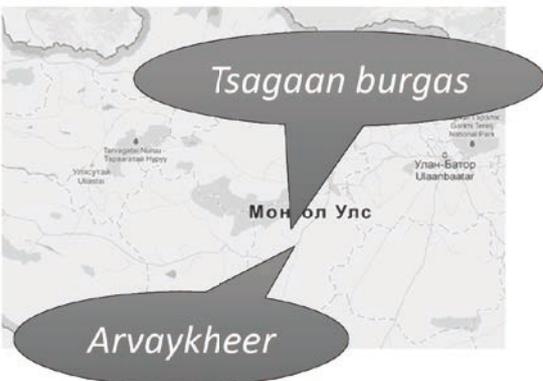
Self-Introduction

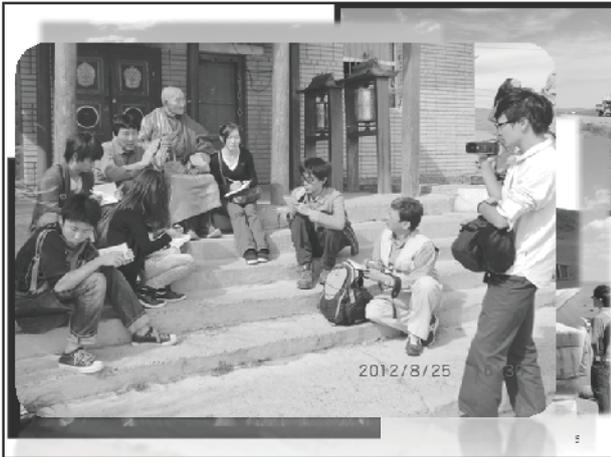
Name

- Yuta Inoue
 - Department of Mechanical Engineering, Osaka Uni.

Research Topic

- Analyze resource depletion based on Sustainability Scenarios
 - How much can we use our mineral resource in condition that we develop as fast as today's economic growth





Member of Group A

- Naomi Oda
 - Graduate school student of sociology
 - Research about Ethical Consumption
- Norikazu Suwa
 - Graduate school student of department human science
 - Focus on how to prevent traffic accidents
 - Work in Bus company

9

Stats

- How many people did we interview
 - 5 Ninja
 - 3 Nomads
 - 1 Lama
 - 1 Organizer of union
 - 1 Doctor



7

Back ground

- There are many environmental related matters
 - Global warming, Air pollution etc.
- In Mongol
 - Ninja (illegal mining)
 - Growing excess number of livestock
 - Discarding of trash
 - Desertification

12

Protect environment through the Union activity

Group A
Naomi Oda, Norikazu Suwa

What we focus on ??

- Environmental problems after *democratization*
- Investigate around Ongiyn river
 - Interview nomad, Rama, Ninja, Doctor ...
- We focus on *Nomads and Union activity*
 - Interviewed *Nomads and Organizer of Union*

11

How Nomads live

1. Nomads live in ger (with *TV* or *Motorbikes*)
2. Nomads eat mainly meat
 - In summer they drink milk-alcohol from horse
3. Nomads pasture livestock
 - 5 animals
 - Cow, Horse, Sheep, Goat, Camel

12

Union activity



Name

- Sh. Nergui
 - The owner of eco-conscious pension

Age

- 70

What he does

- *Manage pension for tourists*
- *Hire nomads and give them some jobs*

15

After democratization

- Lifestyle of nomad changed (based on interview)
 1. Nomads can have more livestock
 2. Safety net for Nomads disappeared

18

Good or bad points

- **Good**
 - Has way of earning money
 - Tourist industry
 - Manage interests of each nomads
 - Money, feed for livestock
- **Bad**
 - Lack of money (subsidy)
 - Lack of intelligence

18

What obstacles Nomads face?

The Jodu occurred, and huge numbers of livestock were dead in 2002

Why so many livestock were dead?

- increase number of livestock
- worsen quality and quantity of grass
- weaken livestock
- livestock die easily

19

Opinion

- The union activity promotes not only improving environment but also nomads life.
 - Nomads spend their life well protecting own old nature (even if in short term perspective)

Same as this case, protecting Mongolian nature is compatible with economic growth.

17

Opinion

- We shall reconsider what new technologies give us and deprive from us
- Material sufficient always makes us happy??
 - Of course there is good point
 - E.g., cell phone make it easy for nomads to communicate easily and correctly

18

Contents

- *schedule*
- *Detail of research*
 - *Ninja*
 - *cashmere*
- *problems*
- *suggestion*
- *conclusion*

sustainability of nomads

Katsuya Shimizu
Ryosuke Wakai

Schedule

- Duration *Aug 21-30th*
- 21th arrive at *Ulan Bator*
- 22th toward *Tsagaan burgas*
- 23th interview, dissolve the gel @ *Tsagaan burgas*
- 24th see the site of mining & interview Ninja @ *Ulto*
- 25th see the meder and local market @ *ARVAHEER*
- 26th inter view nomads @ *Tsagaan burgas*
- 27th interview Rama, visit kinder garden @ *ARVAHEER*
- 28th plant trees @ *Tsagaan burgas*
- 29th toward Ulan Bator

»

Member

- Wakai Ryosuke
 - Management of Industry and Technology
 - Metal fatigue fracture
 - I am interested in cashmere
- Katsuya Shimizu
 - Machine Engineering
 - Group robot localization

Investigation of “Ninja”

- day : 8/24
- place : Oungu
- purpose : investigation the present situation of “Ninja,an on-the-spot investigation of “Ninja”
- main point : the size of the development spot,the feeling of “Ninja”

Investigation of "Ninja"

- The mining exploitation interrupt river stream.
 - "Ninja" lost all livestock by disasters.
 - There are some type of "Ninja".
 - a "Ninja" involved in another work
 - a full-time "Ninja"
 - work with their hands or some machine.
- 
- "Ninja" have to recover the place after work at gold mine.
 - The "Ninja" want to live a nomadic life better than work a gold mine.
 - "Ninja" is aware of making a environmental disruption.

Investigation of cashmere

- exchange cash of fur per 100g (cashmere-4000 MT, wool-50 MT)
- 200-300g cashmere per a goat
- The shearing goat in March or April
- Tsende earns about 2,250,000 MT with 50kg cashmere.
- cashmere's income is the most in his family income.
- It is easy to change money with fur. But price is not stable.
- Most of cashmere in Mongolia sell to Chinese company.
- Mongolian buyers get much gain form cashmere.
- Nomads demand stability of wool, cashmere's cost.
- Nomads pay for gasoline, food, and clothing.

Question

- Though horse is a symbol of nomads, The natural environment of livestock as horse is being destroyed by "Ninja".
 - a lot of gap between a ideal and a fact.
- When gold run out, what do "Ninja" do?
 - (Gold is useful for growth of country better than an individual.)
 - There are a vague problem of social structure

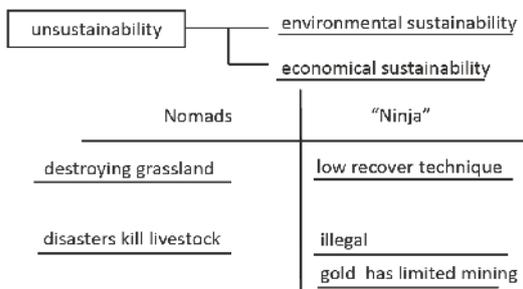
Question

- The number of goat is more than the number of sheep
 - Grass run out in the grassyland
- The price of cashmere depends on Chinese company and Mongolian buyers.
 - Nomads cannot get enough money from cashmere.

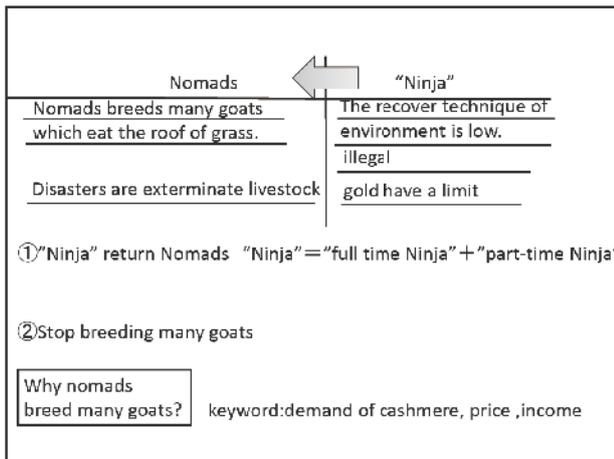
Investigation of cashmere

- day: 8/26
- place: Mr. Tsende's house in nomad area
- purpose: investigation the present situation of cashmere production, nomad's total income.
- livestock: sheep-130 goats-200 housees-50 cattles-10

Common problems



In the future, there are many destructions in environmental and economic filed



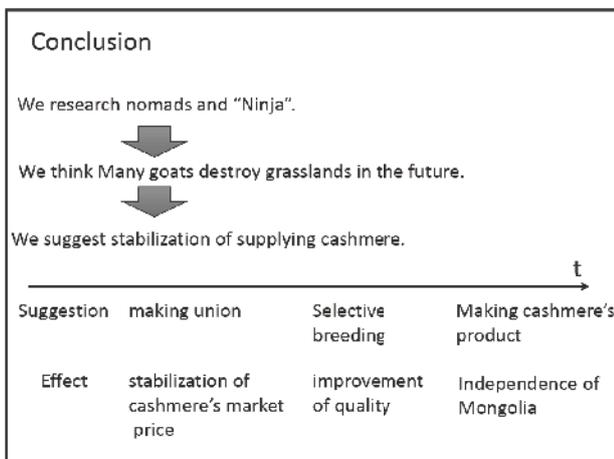
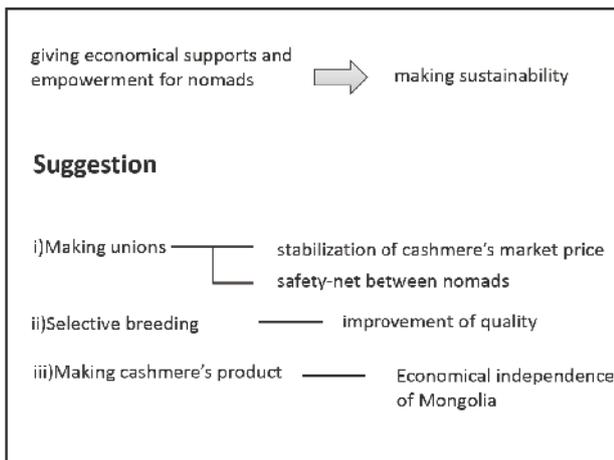
Discussion Theme

- looking for the other way how to be Nomads more economically attractive job.
- How to support "full-time Ninja"
 - having no livestock

Who? Central government, Local government, NGO, etc
Nomads union, Nomads network, etc

How? Employment, Aids, etc

- Partnership between nomads and government



ii. モンゴル科学技術大学での発表後のディスカッションの概要は以下の通りである。

A グループのプレゼン後のディスカッション

- ・ ニンジャにならないようにサポートするしくみが必要
- ・ 政府が採掘を行う企業と話し合うべき
- ・ 採掘したあと戻すべき→チェックする人がいない 各地に管理者をおくべき
- ・ 都市に住んでいる人は仕事がある 田舎に住んでいる人は仕事がないからニンジャになる→ウランバートルだけでなく、他の地域も発展すれば解決するのは
- ・ 個人化が進んでいるため、それぞれのやることに干渉しないムードがある
- ・ たとえ政府が良い決断をしても、実行されるためには企業や人々の協力が必要 ニンジャの問題に関する専門家が足りておらず、専門家によって人々がニンジャにならないよう対策を講じる必要がある

B グループのプレゼン後のディスカッション

- ・ ヤギと羊の比率についてどう思うか
→現状ではヤギが多すぎる
- ・ いろんなヤギがいるから、カシミヤがたくさんとれる種類のヤギを育てればいいのでは
→たくさんカシミヤがとれる種類のものは品質が悪い
- ・ 定住化が問題 今まで通り移住すれば砂漠化は進まないのでは
- ・ 祖父母が遊牧民で、羊やヤギを政府が与えてくれて、それを5年間育て、元手の数だけ返却するという支援がありとても助かった
- ・ 四季の移動がないことに関しては遊牧民の知識不足が原因 身内による伝承だけでなく、専門家が必要
- ・ カシミヤを高く売るためにはどうすれば良いか
いま、家畜の数が増加しているにも関わらず、中国に安値で肉が売られているためモンゴルでは1kg1万トグルグと非常に高い モンゴル国内で製造業を育てる必要
- ・ 組合を作ることでカシミヤの値段が上がれば、よりヤギが増えて環境破壊が進むのでは
→それをコントロールするのが組合

4. 調査報告

i. 遊牧民と資源利用—民主化以降の変化と課題—

小田奈緒美

民主化以降、モンゴルでは、急速に環境破壊が進んでいると言われている。遊牧民と自然との関わりは民主化の前後でどのように変化したのだろうか。遊牧民とニンジャ¹（違法採掘者）、環境保護活動家に聞き取りを行った。調査では特に、遊牧民の生活に不可欠である家畜と、その家畜の食べる牧草という資源に焦点を当てた。

伝統の衰退

モンゴルでは、自然と調和して、自然の中で人々が暮らしてきた歴史がある。「木があれば水がある 水があれば家畜がある 家畜があればゲルがある」ということわざからは、自然と自分たちの生活とが直結していることに自覚的であることが窺い知れる。宗教の中には、土を掘らない、草原を荒らさない、木を切らないという教えがあり、遊牧民は、自然になるべく影響を与えないように生活してきたという。環境保護活動家で、私たちが宿泊したペンションのオーナー、ネルゲイさんは、「遊牧民の文化、習慣法として多くの植物を採ることや水を汚すことは固く禁じられていた。しかし、社会主義以降、それが大きく変化した」と話してくれた²。

その一つが、近年社会問題となっている鉱山開発である。「今から 20 年前、モンゴルのオンギー川³上流で金が見つかった。採掘が行われるようになってから、地表水が急速に失われるようになった。大企業は、今はもう撤退しているが、ニンジャたちがまだ砂金を掘っている⁴」。上を掘ることを悪いことと捉えていたモンゴル人自身が、採掘の担い手となっているのである。開発現場のインタビュー調査で、一人のニンジャは「掘った場所は後で埋めるつもりだ。上流では実際に回復作業も行われているので採掘しても問題ないと考えている」と語っていた⁵。

また、調査に行く先々で、モンゴルの伝統が変化していると感じる場面に出くわした。例えば、馬の代わりにバイクで放牧を行ったり、車で移動をしたりしていた。そのため、

¹ タライを担いでバイクに乗る様子が「ニンジャ」という名のアニメキャラクターに似ていることから、モンゴルでは個人の違法採掘者はニンジャと呼ばれている。

² 2012年8月23日、宿泊するペンションに着いた際のお話より。

³ 437kmあり、最もモンゴル南部まで届く貴重な川。

⁴ 注1に同じ。

⁵ 2012年8月24日、バイクに乗った二人のニンジャがインタビューに応じてくれた。

草原にはあちこちに轍が残っていた。遊牧民のツェンデさんによると、バイクは 2000 年ごろ、車は 2005 年ごろから急速に普及し始めたようだ⁶。また、ゲルの解体作業⁷を見学したとき、昔は草原の上に絨毯を敷いて生活していたのが、木を敷くようになり、その部分の草の回復が遅くなっていると聞いた。

社会主義体制への移行、市場経済への移行という二つの大きな社会の変化に伴い、遊牧民の自然に対する意識と行動が変化し、自然に影響を与えないようにする伝統が衰退していったのだと考えられる。

過放牧

民主化以降の大きな変化としてあげられるのが、家畜頭数の変化である。社会主義時代、政府は一世帯当たりの家畜頭数を制限しており、家畜が制限以上に増えると没収するという施策をとっていた。しかし、社会主義体制が崩壊し、市場経済が導入されると、遊牧民たちは、多くの家畜を持ち、多くの収入を得ようとするようになった。1990 年の民主化以降 1999 年にかけて、家畜頭数は一貫して増え続けた (2007, T.サイボルダ)。しかし、それ以後、寒害や干ばつなどが起きる際に家畜が大量死する事態が相次いでいるという。

「金の採掘よりも遊牧の方が楽しい」⁸と語るジャイカルジャルダルさんは、2002 年の寒害で家畜が全滅してしまい、友人に金鉱山の話聞いて、家族で鉱山開発現場に移住してきたそうだ。家畜は遊牧民にとって財産そのものであり、家畜がいなくなれば生活していく術がなくなる。そのため当時 17 歳だったジャイカルジャルダルさんは、現金収入が得やすいニンジャになったのである。

また、遊牧民のツェンデさんも、2009 年 10 月から翌年 5 月までの寒害によって多くの家畜を失った経験がある。570 頭いたヒツジは 93 頭に、236 頭いたヤギは 32 頭になってしまったという。「民主化する以前にも災害はあったが、こんなにひどい被害は初めてだった。家畜の健康状態が良くなかった」と当時を振り返る⁹。「遊牧をやめることも考えた。いま、遊牧民は大きな矛盾を抱えている。生活を豊かにするために家畜を増やせば環境への負荷が増し、草の質の低下を招く。そのため、家畜が災害に弱くなってしまう。子どもには不安定な生活を強いられる遊牧民にはなってほしくない」。

つまり、民主化に伴い、たくさん家畜を所有するインセンティブが働いた結果、モン

⁶ 2012 年 8 月 26 日、妻、娘、息子と 4 人で暮らすツェンデさん宅を訪れ、行ったインタビューから。

⁷ 2012 年 8 月 23 日、夏のキャンプ地から秋のキャンプ地へ移るためにゲルの解体をするところを見学させてもらった。

⁸ 2012 年 8 月 24 日、開発現場の中にある、食べ物などを売っているお店の中で、金の採掘や売買に携わる 3 人にインタビューを行った。ジャイカルジャルダルさんはその中の一人。

⁹ 注 6 に同じ。

ゴルでは牧草の回復力を上回る家畜が放牧されるようになった。それによって牧草の量、質の悪化を招き、冬の前に十分に栄養を蓄えることができず、家畜が大量に死んでしまったのである。牧草は適切な利用であれば永久に利用できる資源であるが、いったん自然の回復力を超えた利用をしてしまうと、元に戻るまで10年以上かかる、もしくは元に戻らないこともあるという。

今後の資源利用

調査の結果、民主化の前後で遊牧民と自然との関係が変化していることが分かった。土を掘らない、草原を荒らさない、木を切らないといった伝統的な規範は薄れ、収入を増やそうと過放牧が行われていた。

土を掘って鉱物を採り、車やバイクで早く移動し、木を切って燃料にすることは、市場原理の中では、いたって合理的な行動に思われる。できる限りたくさん家畜を飼育し、そこから肉、乳、毛皮といった商品を作り出すこともまた同様である。しかし、一見合理的に見えるこれらの行動が、長期的に見るとそうではないということが、家畜の大量死という形で顕在化していた。それでは、遊牧民は今後、自然とどのような関係を築いていくべきなのだろうか。

先述の環境保護活動家、ネルゲイさんは自然保護を目的に、2000年から協同組合の代表を始めたという¹⁰。一定の土地に柵をすることで、冬の牧草を確保し家畜の死亡を防ぐ取り組みを行っている。「遊牧民たちが自然を守ることを組織的に、かつ意識的に展開できるか」が鍵であると語っていた。このように連帯して自然との関わり方を変えていく試みからは、遊牧民と自然との関わりを再度変化させる可能性を感じた。

【参考文献】

- 今岡良子 1999年「ゴビ草原に探る共生のシステム モンゴルの南の世界から」-『「南」から見た世界(01) 東アジア・東南アジア__中華世界の内と外なる南』姫田光義編、大月書店
- T.サイボルダ 2007年「モンゴルにおける牧畜の現状」-『モンゴル国における土地資源と遊牧民-過去、現在、未来-』p18-31 小長谷有紀、辛嶋博善、印東道子編、内堀基光監修、特定領域研究「資源人類学・生態資源の象徴化」班国際シンポジウム記録

¹⁰ 注2に同じ。

ii. 遊牧民の経済と環境の持続可能性について

清水克哉，若井亮介

1. 緒言

遊牧民はモンゴルの国民 240 万人中のおよそ 40 万人を占め、モンゴルの一部を担っている。彼らは元来、上地土地の環境に合わせた様々な家畜（馬、牛、羊、山羊、ラクダ、ヤク）を飼育、放牧しながら、その家畜から取れる乳、革等で自身の生活の礎えとなる食料を生産してきた。貨幣経済が進むにつれ、それらを製品として売り、貨幣を入手野菜の売買が推進されるようになる。これによって、家畜から貨幣、貨幣からその他の食料や生活用品、それらを再び家畜に供給するといった生活のサイクルが成り立っていた。しかし、近年では国の経済の自由化に伴い、元来のサイクルの中に生活を便利にする車やバイク、さらには携帯電話等が含まれるようになった。この自由化によって上記のサイクルに複数の不具合が生じているとされている。例えば、車やバイクの導入による環境汚染などが挙げられる。モンゴルを走る車の多くは海外の中古車であり、それによってより多くの排気ガスを排出しており、これが原因で環境汚染が深刻になっている。また、ニンジャと呼ばれる金の密発掘を行っているものも増加している。彼らは国によって認可されている企業の発掘後の鉱山に赴き金を発掘する者である。彼らは先ほどの遊牧民のサイクルと異なり、金を発掘し、貨幣を手に入れ、嗜好品を購入するというサイクルが起こらない状況となっている。本稿では、上記のサイクルに発生している問題に関して現地での視察や、遊牧民、ニンジャの方に聞き取り調査を行い、それらを通してモンゴルが今後どのようなことを行えばいいか提言を行う。

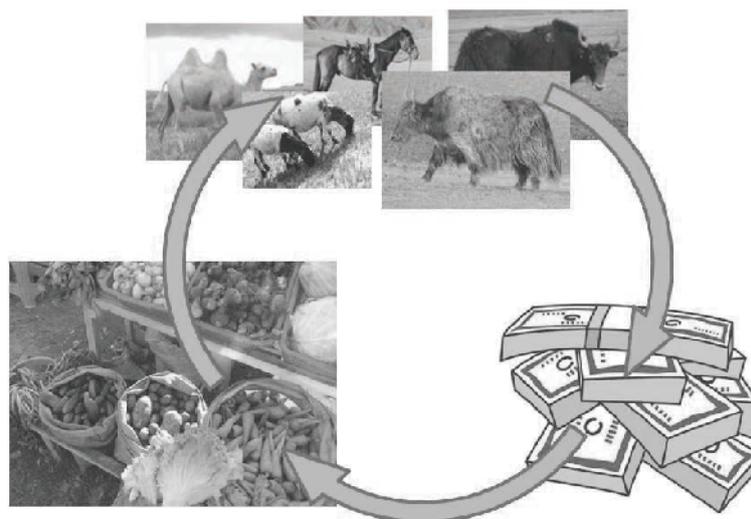


図1 遊牧民の生活サイクル

2. 調査報告

本プロジェクトでは実際のフィールドの視察、3つの遊牧民の家族、5人のニンジャの方に聞き取りを行った。まず、遊牧民の方には生計をどのように立てているか、特に生計の多くを担っているカシミアに関する情報の聞き取りを行った。例えば、カシミアの生産量や頻度、誰に対してどのように売買しているか、カシミアへの依存度などである。次に、ニンジャに関する調査では、企業の発掘の様子や、ニンジャの方の意識や遊牧民の生活の違いなどの聞き取りを行った。

2. 1. 遊牧民に関する調査

以下が遊牧民の方から得られた情報である。特に、多くの情報をいただいた Tsende さんの情報を記す。

●遊牧民視点

- i)遊牧民 Tsende さんでは羊 130 頭、山羊 200 頭、馬 50 頭、牛 10 頭を保有している。
- ii)毛刈りの時期は年に 1 回 3 月、4 月である。
- iii)カシミアの収入は家計の中で最も多い。
- iv)今年は 50[kg]のカシミアでおよそ 2,250,000 トグルを得る。(1 円=17 トグル、およそ 132,000 円)
- v)換金などは容易に行えるが、価格が日々不安定なため安定した価格を切望している。
- vi)Tsende さんをはじめ遊牧民は現金の多くをガソリン、食料、洋服に使用している。
- vii)カシミアは遊牧民それぞれが個人単位でバイヤーに対して取引を行っている。

●市場視点

- i)100[g]あたりのカシミア売買価格はおよそ 4000 トグル、羊毛 50 トグルと大きな差がある。
- ii)1 匹の山羊から 200[g]から 300[g]のカシミアが生産される。
- iii)カシミアの多くは中国企業に売買される。また、中国企業へはモンゴル人のバイヤーによって売買され、価格もそのバイヤーによって決定されている。これによって、カシミアは遊牧民から安く買いたたかれている。

●家畜に関して

- i)本来は羊と山羊の割合は 7 : 1 ないし 8 : 1 である。
- ii)山羊は草の根まで草食してしまう。
- iii)車の導入により遊牧の際に馬で運ぶ必要がなくなり、どんどん生活用品の増加、重量の増加などが発生している。
- iv)車の導入により移動速度が上昇し移動する頻度が減少している。以前は年に 4 回だったが現在は年に 2 回程度である。

着目点

これらの調査情報により以下のことがサイクルの問題として考えられる。

1. 車の導入による定住化
2. 貨幣をより多く求めることによる家畜への負担，家畜のバランスの変化
3. 遊牧民→モンゴル人パイヤー→中国企業というカシミア流通経路

1：車の導入により，馬と比べて運搬機能が向上した結果，より快適な家具などを揃え定住する傾向が増加した．それによって，放牧を行う頻度も減少し家畜が一定箇所です草を食べ続け草原にムラが起るようになった．

2：元来はその土地土地に合った家畜を適正な割合で育てることによって，草原を維持してきたが，より便利さを求めるようになり，結果家畜から生産される製品の中で高価であるカシミアを生み出す山羊を多く所有する遊牧民が増加した．山羊は牛や馬と違い，草の根まで食べてしまう習性があり，山羊の割合の増加によって上記と同様に草原を破壊する要因になっている．

3：現在のカシミアの流行により，カシミアの消費量が増加しているにも関わらず，遊牧民が個人単位で取引をしているため，カシミアの利益の多くが中国企業やモンゴル人パイヤーに搾取されている．

2. 2. ニンジャに関する調査

オンギン河の近郊の採掘現場で視察，聞き取り調査を行った．以下が得られた情報である．



図2：オンギン河の採掘現場

●採掘現場について

- i)河周辺で採掘が行われているが、過度な採掘によって河の分断が多く発生しており、河としての機能を失っている。
- ii)多くの開発企業が重採掘機器を導入している。
- iii)ニンジャ、開発企業は採掘後に河川の修復が義務付けられている。
- iv)ニンジャや企業などは報道を恐れるため、暴力やカメラ没収などが起こりえる。

●ニンジャに関して

- i)ニンジャは採掘を本業にしている者と自身の仕事や遊牧の合間に行っている者など様々である。
- ii)ニンジャは大きく分けて手作業で行っている者と、金属探知機などを用いて行っている者の2種である。
- iii)環境を破壊しているという自覚、非合法で行っている自覚がある。
- iv)聞き取りを了承していただけたニンジャの方は災害などで家畜を失い、それにとまなつて出稼ぎとして金を採掘し始めた。
- v)金を掘ることよりも遊牧民として生活したい気持ちがある。
- vi)金は近くの管理している人と売買しており、その人がバイヤーと取引を行う。

着目点

これらの調査情報により以下のことが問題として考えられる。

1. ニンジャはそもそも非合法である、ニンジャの人が抱いている理想と現実の乖離
 2. 災害による家畜喪失などへの補助の不足
 3. 金が採掘され尽くされた後のニンジャの処遇
- 1：馬が遊牧民のシンボルであり、それらを敬う信仰心、さらには自然を破壊しているという自覚まであるにも関わらず、現実としては金を掘り続けている。これらから貨幣がいかに重要視されているかが伺える。
- 2：ニンジャなどに仕事を求める人の原因の1つが干ばつなどの災害によって家畜を喪失した人へのセーフティネットの不足が挙げられる。これによって遊牧民として生活したいと願っているにも関わらず、金を掘ることによって貨幣を稼がなければならない。
- 3：金は国の成長としては有効ではあるが、自身の生活を金に依存することは危険性が大きい。また、ニンジャの多くは金がなくなる、または規制された時のことを考慮していない。

2. 3 問題提起

各節の着目点のように遊牧民、ニンジャともに環境的、及び経済的な持続可能性に関して欠落していると考えられる。よって、近からぬ将来、環境および経済の両面で現状を維持が不可能になる可能性が高い。

遊牧民：草原破壊による環境持続性の欠如

カシミアの不安定化や災害などの家畜喪失への補助の不足による経済的持続性の欠如

ニンジャ：土地再生技術の不足による環境持続性の欠如

違法行為、金という不確定、かつ持続性がない要素に依存しているという経済的持続性の欠如

3. 提言

前章で挙げた問題を解決する道筋として、①ニンジャをやむなく行っている人を遊牧民に戻す、②環境負荷の高い山羊の放牧を正常な状態に戻す、ということが考えられる。これによってニンジャの経済持続性が正常化し、モンゴル国土の環境の持続性が取り戻される。そこで、遊牧民の中で行うことを短期、中期、長期の内容で提案する。

まず、短期的な内容としては組合の設立が挙げられる。現在カシミアは遊牧民が個人単位でバイヤーと売買しており、それによってバイヤーに買ったたかれている現状がある。そこで、組合を設立することによってバイヤーへの対策を行うことができ、安定した市場価格を実現するとともに利益の確保も行える。これによって、経済的な持続性が容易になる。また、下記の価値を増加させることも含めると現在環境を破壊しているほどの山羊の放牧数を抑制することも可能になると考えられる。さらに、組合が代表して遊牧民間のセーフティネットの実現も行う。災害などで家畜が失われてしまった組合加入者は他の加入者から家畜を少量ずつ提供し遊牧を継続する。その後、遊牧によって一定数の家畜が確保できた時に提供した他の加入者へ家畜を返還する。これによってお互いが助け合いニンジャなどに仕事を求める必要性がなくなる。また、現在ニンジャとして働いている者が加入を希望した場合は同様の手順を行うことが出来る。実際に、政府は家畜提供、増加後の家畜返還ということを試験的に事業内容に組み込み始めている。

組合を設立することによるもう1つの目的は、利益のみを追従するものへの抑制が挙げられる。価値が高くなるにつれ、より多くの貨幣を生み出したいということを考えてしまうが、それによって草原が機能しなくなるとは持続性が失われてしまう。そこで、組合を設立し、遊牧民間の規則を決定することで、お互いがそれぞれで管理することが可能になる。

次に、中期的な目標として安定した供給，市場価格をより増加させることを考える。一例としては山羊の品種改良によるカシミアの品質の向上が挙げられる。牛は品種改良を行うことで乳成分の多い乳牛を飼育することなどを行っている。これと同様にカシミアの品質が高い山羊同士を交配させることでより単価の高いカシミアを生産することを目指す。より品種改良によるカシミアの毛刈りの回数の増加も考えられるが，こちらは品質が劣化してしまうことが知られており遊牧民の価値の増加には繋がりにくい。

最後に、長期的な目標としてカシミア製品の製造が挙げられる。現時点でモンゴルは金という経済持続性のないもの、およびカシミアという材料のみを輸出しており、経済的な自立はしているとは言えない。そこで、現在金に関して有効な関係が築けている日本などの連携を行い、カシミアのワンストップの製品化までを行うことを考える。これによって、モンゴル全体の利益の向上を狙う。また、工場などを国が設立することによって雇用の増加が発生し、例えばニンジャなどを行っている人への仕事の斡旋などが可能になると考えられる。

このように、現時点の環境持続性のない金と製品価値として低いカシミアに依存しているモンゴルをカシミアの品種改良，製品化という経済的，環境的持続性の高いものでなりたさせる案を提言する。

5. 日蒙幼稚園交流について

i. 交流にあたり

せっかくモンゴルに行くのだから、私だけではもったいない、周りを巻き込もうと思った。そこで、兵庫県姫路市にある神姫ひかり幼稚園に声掛けをしたところ、大変熱心に対応いただいた。（実は私は、社会人学生であり、バス会社に 30 年勤務している。そしてこの神姫ひかり幼稚園はグループ会社が経営している）またモンゴル側については、指導引率の思准教授のおほねおりによりオブルハンガイ県アルバイヘル市国立第 4 幼稚園と交流できることになった。幼児たちの絵を交換することによって、海外フィールドスタディに参加した私たち学生だけにとどまらず、幅広い日・蒙文化の交流が図れたものである。

今回の目的は、海外フィールドスタディによる「開発と生存環境」を調査・研究することであったが、子どもたちと直に交流を図ることによって、日本とモンゴルの将来が見えてくるであろうと考えた。

ii. スケジュールと概要

日時	内容
平成 24 年 8 月上旬	神姫ひかり幼稚園の園児が絵を描く。
平成 24 年 8 月 27 日（月） 14:00～16:00	モンゴルの幼稚園（モンゴル国オブルハンガイ県アルバイヘル市国立第 4 幼稚園）を訪問。ひかり幼稚園の園児が描いた絵を贈呈。
平成 24 年 9 月 28 日（金） 10:30～12:00	神姫ひかり幼稚園でモンゴルの幼稚園児が描いた絵の紹介、歌やダンスのムービーを鑑賞する報告会の実施。

まず 8 月上旬に、神姫ひかり幼稚園の園児が「日本の四季」をテーマに絵を描いた。そして、8 月 27 日（日）首都ウランバートルから南西約 450 km にあるアルバイヘル市国立第 4 幼稚園（ナランジェジェグ園長・在園 200 名）を今回のフィールドスタディ参加者 5 名と引率者・関係者で訪問した。当日は日本と同様に夏休みにもかかわらず 20 名の園児が登園し、交流を図ることができた。日本から持参した、折り紙の本・凧・（姫路市のキャラクターであるしろまるひめのステッカーのお土産を贈呈した。そして、神姫ひかり幼稚園の園児が描いた日本の四季の絵と園児の行事など 20 枚の生活写真を説明した。また思准教授の通訳により楽しく交流を図ることができた。

国立第 4 幼稚園の園児たちは、モンゴルの歌やダンスを披露してくれ、授業の一環として自分の好きな絵を描いた。その 18 点とモンゴルの町並みを描いた優秀作品 7 点を受け取り持ち帰った。

9 月 28 日（金）神姫ひかり幼稚園で、モンゴルのお菓子を食べながら、モンゴルの国の説明とアルバイヘル市国立第 4 幼稚園の園児の歌やダンスのムービーを、神姫ひかり幼稚園の園児たちは非常に興味深く鑑賞した。園児たちから「何を食べているの」などたくさんの質問がだされ、説明役の私が困ってしまう場面があった。

iii. 感想

グローバル共生社会の実現のため、とかいう大上段に構えるのではなく、普通のひとがごく普通に交流できる、国の存在とか政治・宗教・経済など関係のない社会、おおげさか

もしれないけれど、子どもたちが素直に自己表現し、それを見ていた私たち関係者もうれしくなる状況が体験できて自分自身満足している。この感動を他の多くの学生たちに味わってもらいたい。

モンゴルのおはなし

ひかり幼稚園のみなさんへ

モンゴルのしぜん



モンゴルってしていますか？



モンゴルのどうぶつ



モンゴルってどんなくに？

- 国名 モンゴル国
- 面積 約156万4,100km² (日本の約4倍)
- 人口 約273万5,800人
- 首都 ウランバートル



モンゴルのくらし(そうげん)



モンゴルのくらし(まち)



モンゴルのようちえんに いきました



モンゴルのくらし



モンゴルのようちえんのようす



モンゴルのたべもの



ゆりぐみさんのえをプレゼントしました



モンゴルのおともだちも
しんけんにみんなのえをみてくださいました



モンゴルのおともだちから



* おうたとダンスのプレゼントをしてくださいました。

モンゴルのおともだちもいっしょけんめい
えをかいてくれました



* モンゴルのおともだちからは
「すてきなえをありがとう」というかんそを
もらいました。

* せかいにはみんなとおなじように、ようちえんにか
ようおともだちがたくさんいます。
「モンゴルっておもしろいな」とおもったこは、
おとなになったらぜひモンゴルにいてみてね！

みんなでがんばりました



6. モンゴルの食べ物

モンゴルでは現地で手に入れた食材で料理を作ったり（主に先生が作って下さりました）、宿泊先のオーナーさんの伝統的な手料理をいただいたり、レストランでモンゴル料理を食べたりしました。また、調査に協力してくれた方が振る舞って下さることもありました。



写真 1 搾乳の様子

馬乳酒という、馬の乳を発酵させて作る微炭酸のお酒は、モンゴルの代表的な飲み物。下の写真のように、革袋に入れて作る伝統的な家もあれば、プラスチックのバケツのような入れ物で作っている家もありました。

家を訪ねると、みんな必ず馬乳酒を振る舞ってくれました。お椀に一杯注いで、飲んだら同じお椀にまた馬乳酒を注ぎ、他の人が飲む、というのが慣習でした。やや酸味の強い飲むヨーグルトに炭酸を少し混ぜたような味がします。家によって味がかなり異なるところが印象的でした。

また、ふだんの食事によく食べられているのは、モンゴルうどんと、ホーシヨールという料理です。うどんには、牛肉が入っていて味付けはシンプルに塩のみ。麺は沖縄のソーキそばに似ていました。ホーシヨールとは、揚げ餃子のようなもので、皮が厚く、中には牛肉やタマネギが入っていま

ここでは、モンゴルの食べ物について紹介します。

モンゴルでは、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダという5種の家畜の恵みを利用した食文化が発達してきました。そのため、さまざまな種類の乳製品と、肉を使った料理が豊富です。

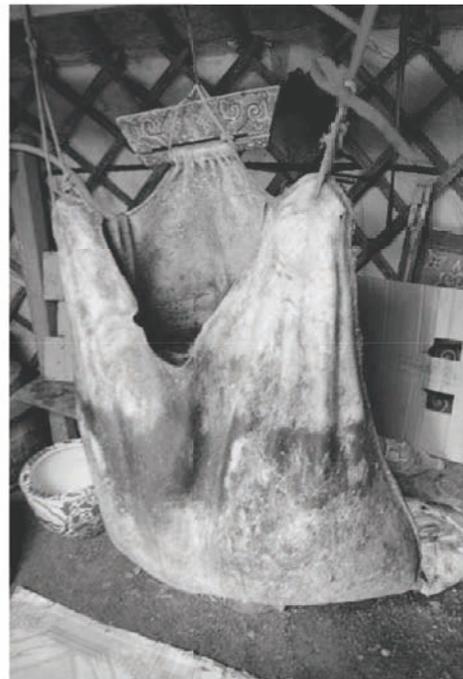


写真 2 発酵中の馬乳酒

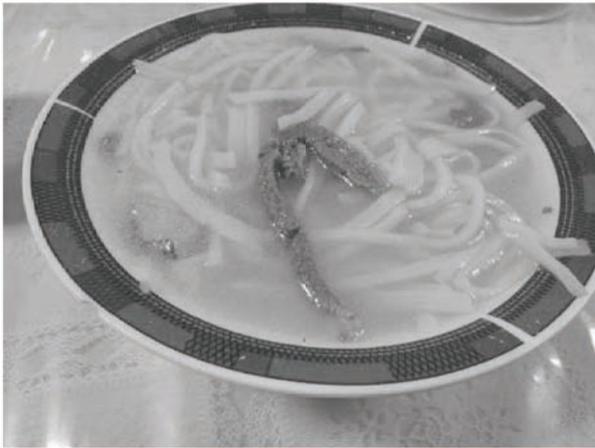


写真 3 モンゴルうどん

す。遊牧民のツェンデさんのお宅に調査で伺ったときにはホーショールづくりの様子を見せてもらうことができました。また、揚げたてのホーショールにトマトソースをつけたり、ピクルスを乗せたりしていただきました。

また、お祭りのとき、大事なお客さんが来たときなどのお祝いの席では、ホルホグという料理が食べられます。ホルホグを作るときは、神経を切断し、頭を切り取って内蔵や骨を全部首の部分から取り出すという、特別な屠殺方法が用いられるそうです。ヒツジの肉、タマネギ、ニンジン、ジャガイモ、馬乳酒、塩が材料で、調理には熱した石が用いられます。温度調節が難しく、経験が必要な料理だそうです。また、食べる前にはウォッカを3杯飲むのがしきたりだそうです。



写真 4 ホーショールの皮作り



写真 5 お祝い料理 ホルホグ



写真 6 ホルホグの調理

チャガンボロス滞在中は、右の
写真の食堂で毎日ごはんを食べて
いました。野菜や食器は、近く
にある川で洗っていました。モン
ゴル人はあまり、野菜を食べる習
慣がありません。肉ばかりの食事
で私たちが体調を崩さないよう、
先生方ができるだけ野菜を使った
料理を作ってくださいました。そ
んな食事が続いたころ、調査に同
行してくれたモンゴル人のソス



ロさん（写真右手前の女性）が、逆に野菜の食べすぎで体調を崩してしまいました。食生活の違いを実感しました。

チャガンボロスでの滞在最後の日は、私たちが調理をして、お世話になった方々に食べてもらいました。サラダやじゃがバター、炒め物、そしてホーショールを作りました。

食べ慣れない食事で胃が疲れることもありましたが、モンゴルの食べ物を味わうということは、モンゴルの土地の性質や文化を体感することにもつながりました。

	朝	昼	晩
21	火	機内食	中華料理
22	水	ホテルビュッフェ	モンゴルうどん
23	木	ボルシチみそ汁(インスタントみそ汁、キャベツ、ボルシチ、にんじん)	サラダ(ピーマン、わかめ、大根、トマト、にんじん、レーズン)
		じゃがいもの炒め物(じゃがいも、辛い調味料)	スープ(じゃがいも、にんじん、牛肉)
		白菜の炒め物(白菜、牛肉)	カクテル
		ごはん、魚、干し羊頭肉、ピクルス	
24	金	?	ラーメン(ラーメン、メンマ)
		モンゴルやきそば、ごはん	
		きくらげと卵と牛肉の炒め物	ポテトサラダ(じゃがいも、にんじん、ツナ、タマネギ、わかめ、ピーマン)
25	土	各自パン、紅茶など	カレー(ルー、じゃがいも、にんじん、牛肉)
			モンゴルうどん
			卵とトマトの炒め物
26	日	カレー、卵とトマトの炒め物、パン	ホーショール(牛肉、タマネギ、小麦粉、塩)
			ホルホグ(羊肉、タマネギ、にんじん、じゃがいも、馬乳酒、塩)
			トマトソース、ピクルス
27	月	?	お肉とじゃがいものグリル
			白菜の炒め物(白菜、ニンニク、牛肉)
			タマネギとお肉のピリ辛炒め
			おかゆ
			ピーマンとお肉のピリ辛炒め
28	火	炒め物(白菜、牛肉、キャベツ、タケノコ)	じゃがバター
		モンゴルうどん	ホーショール
		おかゆ	ツナサラダ
			炒め物(にんじん、白菜、大根、わかめ)
29	水	パン、ゆで卵、紅茶	うどん、サラダ、ホーショール
			中華orインド料理
30	木	ホテルビュッフェ	科学技術大学の食堂
			鍋料理
31	金	機内食	

7. 個人総括

i. 井上裕太（工学研究科 機械工学専攻 2年）

1. 渡航前の計画の実施状況

調査計画においてニンジャと呼ばれる採掘者の問題を通じて、モンゴルの将来像を描くということが渡航前の計画であった。実施においては、モンゴルのニンジャや遊牧民に対してインタビュー調査を行い、彼らの考え方やおかれている現状を把握した。実際に対面しインタビューすることで、人柄やニュアンスを感じ取ることができ、民主化以降のモンゴルが直面している、現金収入の必要性や、そのためにニンジャになったり、家畜の飼育頭数を増やしたりなどの問題が理解できた。採掘現場ではロシアや中国の機械が多数導入されており、技術導入などの支援方法も将来を考える上で重要なファクターであると考えられる。

2. 現地で発見したこと

食生活と教育に対する考え方である。まず、食生活であるが、遊牧民の食べるものはほとんどが、肉と乳製品であった。我々、日本人は肉を食べ過ぎることで体調を崩すことがあるが、モンゴル人においては野菜を食べ過ぎることで体調を崩すことがあることに驚いた。また、チーズなどの乳製品は欧米のものと味が異なった。馬乳酒と合わせて飲むと良いとのこと。また、馬乳酒は栄養価が高く、一部の遊牧民は夏の間馬乳酒のみで過ごすそうである。また、馬乳酒の製造方法もかつては牛の皮で作られた入れ物に入れていたが、現在はプラスチックが導入されるなど、伝統と技術導入のバランスに関する問題がここでも見受けられた。

3. 自分の生存と環境への意識の変化

開発や技術導入によって人々の生活は簡単に様変わりする印象をこのプログラムに参加することで感じた。実際、金の採掘現場では金属探知機などの装置が個人単位で導入されていた。ゲルにおいてはソーラーパネルや蓄電池が装備されており衛生からテレビ放送を受信できるようになっていた。また、携帯電話により遊牧民同士の連絡がより正確になったようである。一方で、生活に対する考え方は維持されているようで、プラスチックなどのゴミが投棄されていた。開発やよりよい生活のための技術はその使い方の教育も大切であるが、どの程度かつてのものと違い環境へ影響があるかを伝える必要があると感じるようになった。

4. 今回の経験をどのように生かすか

インタビューやディスカッションを通じて実際にコミュニケーションをすることの重要性を再認識した。また、現場でしかえられない情報もあり、例えばゲルは寒く住むには適しておらず、定住する遊牧民も増えてきているという様なことは現地で実際に泊まってこそ得られる情報だと考える。今後は、このような貴重な体験を発表などの様々な機械を通じて伝えていきたいと考えている。また、現地で情報を得るという姿勢を常に持ち続けたいと考えている。

ii. 小田奈緒美（人間科学研究科 人間科学専攻 社会環境学講座 1年）

1. 渡航前の調査計画と現地におけるその実施について

渡航前は、3回の事前学習を通して全体の調査計画について話し合いました。また、各自の興味関心について研究計画書を作成し、共有を行いました。現地では、調査計画通り、遊牧民やニンジャにインタビューを行うことができました。また、実際の状況に合わせてテーマや質問項目などを変更しながら調査を進めました。二つのグループに分かれ①組合活動を通じた環境保護②カシミヤを例に、モンゴルの持続可能な発展というテーマで30日に、モンゴル国立科学技術大学でプレゼンテーションを行いました。また、発表をもとにモンゴルの学生たちとディスカッションを行いました。

2. 現地での調査・交流で得られた新たな発見について

モンゴルの民主化以降の変化が至る所で観察できました。ゲルにはアンテナや太陽発電装置が設置されており、中にはTVがありました。バイクで放牧し、移動にはトラックを使っていました。遊牧地域では、現金収入を得ようと家畜を増やすことで、土地が脆弱になり、栄養不足だった家畜が冬を越せず大量死してしまう「ゾド」が問題となっていました。鉱山開発現場では、ゾドで家畜を失い、「ニンジャ」になった元遊牧民に出会いました。家畜の生み出す恵みに依存して生活する遊牧民は、それゆえ環境の変化の影響を受けやすく、また、第一次産業に偏ったモンゴルの経済は、市場の影響を受けやすい。今回の調査では、自然と、市場との狭間で矛盾を抱える遊牧民の姿が浮き彫りとなりました。

3. 開発と生存環境に対する参加前後の意識・意欲の変化について

参加前は漠然と、環境破壊を引き起こす開発に対して問題意識を持っていました。実際

に現地へ赴くことで、この問題は局所的なものではなく、今の世界に共通する根源的な問いにつながるものが分かってきました。それはすなわち、「自分の目先の生活」と「環境」についてです。生きるためには双方が不可欠だけれど、生活を良くするための合理的な選択が、環境を破壊することに繋がってしまう社会のシステムが垣間見えたように思います。環境を壊さない持続的な発展のためには、生活か環境かの二者択一を迫るのではなく、生活も環境も良くしていけるシステムの構築が不可欠であると感じました。

4. 参加によって得られたものを今後どう生かすかについて

今回のフィールドスタディは私にとって初めて海外で調査を行うものでした。実際の調査は研究計画通りにいくものではなく、柔軟に対応しながら進めて行くことの重要性を学べたことが大きかったです。また、チームで研究する際にどのように貢献すべきであるかについて他の参加者から学ぶ点が多くありました。

10日間という限られた時間の中で、やり残したこともたくさんありました。今後、研究活動が続けて行く中で、今回の調査中、調査後に感じた反省点を生かして、調査に入る前にできる限りの情報収集をしておくこと、体調管理をより意識的にを行うこと、常に自分の中に問いを明確化しておくことなどを肝に銘じて、調査に臨みたいと思います。

5. その他コメント

引率の先生方には本当にお世話になりました。レクチャーするのではなく、自分たちでどのくらい問題を掘り起こし答えを出せるかという点に配慮しながら指導いただき、とても感謝しています。ぜひこれからも、モンゴルでのフィールドスタディを続けてほしいです。

iii. 清水 克哉（工学研究科 機械工学専攻 2年）

1. 渡航前の調査計画と現地におけるその実施について

先生から事前に伝えられていた計画はおおむね実施されており、計画としては滞りなく行われたと感じた。しかし、その計画自体は実施しながら（我々がどのように感じたかによって）随時変更、修正を加えられたので、計画の全体像を理解することに時間がかかってしまった。もう少し、事前計画の中で1つ1つのトピックの関係性を伝えること、最終的なゴールを共有することが必要ではと感じた。また、我々が各々行いたいと考えていた調査に関してどのような方にインタビューするかは理解していたが、その方に会いに行くまでの道のりなどインタビュー以外のトピック全体の把握はもう少し行うべきであった。

2. 現地での調査・交流で得られた新たな発見について

まず、書籍やネットの知識（特に、今回のような未知の環境へ行く場合）には必ず偏りや誤りがあるということを強く認識した。例えば、ニンジャの現場インタビューに行く際、ニンジャの人たちでさえ他の人にはインタビューできないというような事が常識となっていたが、実際には快くインタビューに答えてくださった。このように、人である以上意識の違いがあり、さらに書籍などはその人のミクロな経験で語られる場合があるので、それを事前を知ることで思いこみを防ぐことができると知った。

3. 開発と生存環境に対する参加前後の意識・意欲の変化について

グループワークで行われるプログラム、ましてや海外で行うプログラムなので、「メンバー、渡航先の方々に迷惑をかけてはいけない」という気持ちを常に持ち、その意識は渡航前後で変化なく高い状態を保つことができたと思う。

また、私は副プログラム「コミュニケーション・デザイン」で培ったコミュニケーションへの強い意欲を持って参加したため、行動への恐れはあったものの、全体を通して人と関わりたいという気持ちが持てたとと思う。

4. 参加によって得られたものを今後どう生かすかについて

日本語はコミュニケーションにおいて高いレベルを有しており、ハイコンテクスト文化、言わなくても相手がかみ取ってくれるという文化であることを痛感した。特に今回は私自身で意思疎通が図れないため何か話さなくては、開きなって花咲く手はということ強く感じた。この教訓や学んだ事を胸に日本人ならではの勝手に解釈してしまうことを抑制し、確認のコミュニケーションを海外で積んでいきたいと感じた。

5. その他コメント

我々日本人だけではなく、留学生などもメンバーに加えられるともっとプログラムに幅が出来ると感じた。これを行うと海外の人が他の海外国を見たときの印象を得る事が出来、現地を通じて留学生の国の一端を知ることができる。

また、思先生を始め様々な方の助力を得てこのプログラムが成り立っていると感じました。改めてその方々に感謝を述べると共にこのプログラムが体力や精神的に厳しくはあるのですが、今後も続いてほしいなと感じました。

iv. 須和憲和（人間科学研究科 人間科学専攻 人間行動学講座 2年）

1. 参加して得られたこと

まず、人間が人間らしく生きるとは、どういうことかを再考した。そして、価値観の違いについても体験を通じて確認することができた。科学技術の進歩により、モンゴルの遊牧民においても、人々の生活は携帯電話・衛星放送・太陽光パネルなど物質的に豊かになったようだが、果たしてこれで良いのだろうか。また、伝統的な文化と科学技術の融合について考えると、各地域によって対応の仕方、つまり自分自身の生き方が異なってくるであろう。

次に、現地での調査・交流によって、子の思い・親の思い・学生の夢についても新たな発見に繋がった。日本の園児が描いた四季の絵をモンゴルのアルバイヘル市国立第4幼稚園へ持参訪問し、子どもたちの元気な様子を動画で収録、後日日本の園児たちに見てもらい交流を図った。また、遊牧民の親として、子どもに高等教育を受けさせ、りっぱになってほしいという思いが伝わってきた。さらに、モンゴル国立科学技術大学におけるフォーラムで学生たちが国際協力、モンゴル人としてのアイデンティティの確立等具体的な目標をもっていたことが印象的であった。

2. 体験を今後の研究・キャリアにどう活かせるか。

価値観の違いを理解しあえる日本・モンゴルの交流、特に学生交流を中心とした国際交流に積極的に参加協力したい。特に、指導引率の思准教授から、国際情勢・日本人学生・リーダーシップ論まで幅広く現地での具体的事例をもとに教示していただいた。

- ①日本の方向性—米・西洋からアジア中心に
- ②日本人学生は脆弱—コミュニケーション（言語を知るのではなく、伝え方、伝えようという気持ちが大切）タフネス（頭では分かっている、力を発揮する体力がない）
- ③価値観の違い—違いを知るから自分自身の存在を知る、互いに共存するという概念
- ④リーダーとは—意味のない意見はない、聴くこと

以上を参考に、今後の自分自身の幅を広げいつまでも学び続ける姿勢を持ち続けたい。

v. 若井亮介（工学研究科 ビジネスエンジニアリング専攻 2年）

モンゴルと聞いて、以前の私のように相撲や大草原の居住場所であるゲル程度しかイメージが湧かない方も多いのではないのでしょうか。近いようで遠い国モンゴル、フィールド

スタディの訪問国を選定するにあたりこの国を私が選んだのも、この機を逃せば二度と行くことは無いだろうと勝手に未来予想ができたからです。そんな貴重な機会をご提供くださいました、思先生・宮本先生・福田先生にまず感謝を申し上げます。10日間の現地調査を無事終える事ができたのも先生方のサポートなしには考えられませんでした。本当にありがとうございました。

次に具体的な現地での様子に関して記述させていただきます。私がモンゴル調査の目的としましたのが「カシミア生産の実態を知ること」でした。なぜカシミアなのか、それは学部時代にファッションブランドで販売員のアルバイトをしていたことがきっかけです。当時、ある漠然としたギャップがいつも頭の中に残っていたのです。それはブランドによって生じる値段の差です。私の店ではカシミアのセーターは1着3万円という高値で販売されていたのにも関わらず、同じカシミアでもファストファッション店では5千円という価格だったのです。この長年の苦悩(?)を解決する機会がこのモンゴルフィールドスタディでした。現地では思先生にご紹介いただきました複数の遊牧民の方へのヒヤリングを通して調査・検証を行いました。そして徐々にモンゴルが直面するカシミア生産の実態が見えてきたのです。遊牧民の方は遊牧生活を営む上で、山羊・羊・馬・牛といった家畜を育て乳や毛皮、肉をとりバイヤーなどと現金や生活用品と交換します。カシミアは山羊の毛を指す言葉であり、他の動物の毛に比べて交換価格が高いことから遊牧民にとって生活費を賄う上でなくてはならないものです。しかし、独自の販売経路を持たない遊牧民にとってカシミアの売買はバイヤーに依存します。つまりバイヤーの思い1つで値段が決まってしまうのです。現状バイヤーからの買い取り価格は、流通価格に比べて1/10~1/20程度の値段となっており、それがファストファッションのカシミア製品の安価な値段にも繋がっているのではないかと考えられます。

我々は、遊牧民の方がカシミア生産の対価をより多く手に入られるよう、カシミア売買における提案を、モンゴル科学技術大学にて行いました。主な内容としては、遊牧民の家庭を結びつけることでカシミア売買のコミュニティを作り、発言力を持たせる事で売値価格を向上させるというものです。大学でのプレゼンでは、モンゴル人学生からも好意的な反応をいただけることができ、アウトプットが出せたという意味でも非常に有意義なフィールドスタディであったと感じています。今後とも、このような貴重なフィールドスタディの機会を多くの学生の方に経験していただくことで、世界中に存在する諸問題に対して問題意識を持っていただければと思います。

2012年度海外フィールドスタディプログラム

メンバー「開発と生存環境」活動報告書

発行日：

2013年3月31日（非売品）

編集発行：

大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）

海外体験型教育企画オフィス（FIELD0）

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16 全学教育総合棟1-3階

TEL：06-6850-5176 FAX：06-6850-5185

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>

印刷製本 株式会社 遊文舎



大阪大学グローバルコラボレーションセンター

豊中市待兼山町 1-16 全学教育総合棟 I-3F

TEL: 06-6850-5176 FAX: 06-6850-5185

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>